

研究・調査報告書

報告書番号	担当
9 4	札幌医科大学医学部薬理学講座
題名 (原題/訳)	
A 21-year longitudinal analysis of the effects of prenatal alcohol exposure on young adult drinking. 妊婦のアルコール摂取が出生後 21 年経過した若年成人に与える効果についての分析	
執筆者	
Baer JS, Sampson PD, Barr HM, Connor PD, Streissguth AP.	
掲載誌 (番号又は発行年月日)	
Arch Gen Psychiatry 60(4): 377-385 (2003)	
キーワード	
妊婦、飲酒、胎児アルコール被曝、アルコール関連問題	
要 旨	
<p>背景: 妊婦のアルコール摂取はその子供の成人後におけるアルコール関連問題の進展に関する危険因子であると考えられる。この点について、妊娠中にアルコール暴露された妊婦の子供について出生後 21 年間の経過分析を行い検討した。</p> <p>方法: 妊娠中期の周産期検査で行った婦人面談のデータを基に、その子供が現在 21 歳となった時点でのアルコール使用やアルコール関連問題との関連について検討した。妊娠期間中の母親の飲酒の記録は、喫煙、カフェインや他の薬物の使用、人口統計的要因などの結果と共に、1974 年 11 月 4 日から 1975 年 10 月 2 日の期間に評価されたものである。アルコール問題の家族歴は、子供が 14 歳の時と、現在 (21 歳) の時点で両親の面談を基にして評価した。両親のアルコールや薬物使用や、多方面からの家族環境についての評価は出産後 21 年間を通じて 7 種類の親族で行った。若年成人(21 歳、[N=433])の飲酒量やその頻度についての評価は自己申告で行い、またアルコール関連問題や依存性の測定のため「アルコール依存性評価」を行った。</p> <p>結果: 一変量、部分最小二乗回帰分析の結果は妊娠時のアルコール摂取はその子供が 21 歳となった時点でのアルコール問題の進展に(統計的に)有意な関連をもっていることを示している。この相関は、アルコール問題、喫煙、妊娠中の他の(薬物などの)暴露、両親の薬物使用を含む出生後の環境要因などの家族歴の影響からは無関係である。妊婦の喫煙は 21 歳の子供でのアルコール問題とは関連していない。</p> <p>結論: 妊娠中のアルコール暴露(摂取)はヒトのアルコール問題を進展させる危険因子であり、胎児のアルコール暴露の影響やアルコール問題の進展で働いている機序をさらに研究する必要がある。</p>	